

東洋にては古くより書と画を同じ畫面に描きこむ作品、傳統的に有力なる分野を構成せり。寫經に佛畫、繪卷物の詞書に繪などその例多し。「五大にみな響き有り 十界に言語を具す 六塵ごとごとく文字にして 法身はこれ實相なり」と言語を宇宙の中心に据ゑた空海なれど、日本に始めて大曼陀羅を將來せる折に、佛教の神髓は深玄なればことばのみにては表現し難きゆゑに、ここに假に圖畫つまり繪畫として示すと但し書きを付す。文字の持つ意味、内包と、繪のイメージ性との微妙なる融合を目途するところなり。

畫中の人物に關する文字、詩文を同一畫面に書きたるを「畫讚くわさん」と稱し、繪と文字の匂ひ合ひが鑑賞さる。日本にては京都は東寺なる「眞言七祖像」に書されたる畫讚が始めとさるるが、そこには後の書家にはまねびやうもなき擦れたる飛白體の漢字、梵字が書かれて、壓倒的なる迫力を感じさす。その後畫讚は禪宗にて珍重され、その典型たる室町時代の繪、瓢箪にてなまづを捕へんとせる「瓢鮎圖」には、禪僧三十名ほどの畫讚、書込まる。畫讚は描かれたる繪を見て、そが讚嘆を表はす詩文を書するが本來にて、繪理解の一助にもなるものなり。

繪と言葉との共演と言ひうるが、繪先行とは反對に、先に詩文、主として俳諧が先に書されて、それに關する繪を描きたるが「俳画」と呼ばるゝものなり。つまりは俳諧の生まれて以後の、江戸中期以降より作らるゝやうになりたる書画一體の作品なり。芭蕉なども己が俳諧に軽く画を描きたるものあれど、俳画の初期といふべく、手遊びすまびに過ぎずして、画としての俳趣を持つまでにはいたらざりしものなり。俳画の分野にて最も完成せる作品作りたるが蕪村なりとは後世の衆目の一致するところなれど、さりとして蕪村自身はかかる分野の己が作品につきては「はいかい物の草画」と稱せり。楷書的ならぬ繪の草書を意識せるものならむか。

安永五年（一七七六）に蕪村は、求め手より催促せられし画十二枚を送るにあたりて次の如き書簡を添ふ。

「右いづれも尋常の物にては無之候 はいかい物の草画 およそ海内に並ぶ者覺えこれなく候 下直げちきに御ひさぎ下され候儀は御容赦くださるべく候」

己れの俳畫は人に抜きん出てをり、下直（安價）に御ひさぎ（賣却）になられては困る、と自讚自負をしたたむ。畫技に油ののりたるを自覺せるゆゑならむ、以後俳画の佳作次々と産み出されたり。推戴せられて師と仰げる宋阿宗匠が跡を襲ひて「夜半亭二世」となりたるが切つ掛けならむ。

繪畫ジャンルの一つとして「俳画」なる語が定著せるは、筆者には豫想の外なりし人物、渡邊華山によるといはる。蕪村の死の十年後に生を受けし華山は、年少の頃より生計の助けにと繪を習ひて熟達せるも、幕末も近き混亂の中、責任をとりて自刃するに至りたりほどの實直なる人物なり。徹底せる寫實を心掛けし華山、かの緊迫感を内に秘めたる「鷹見泉石像」「佐藤一齋像」を描き、美人畫を描きても端正さの損はれることなき華山が繪なれば、俳諧趣味、

時には滑稽味を含む「俳画」のあるは筋違ひと思ひしも、『俳画譜』なる木版の画帖ありて、その序文に俳画を規定す。

俳諧繪は唯趣を第一義といたし候、…近頃蕪村一流をはじめおもしろく覺へ候 …

世の事うとく訥辯に素朴なるが風流に見え候通 この按排を御呑込みあるべし」

とあり、俳画には俳趣、風流なくては適はぬとなしとて、蕪村の「盆踊リノ圖」を摸寫しをりたり。俳画は、世界最短の詩なる發句、俳句に添へられたる繪なればこそその單純化、簡略化おこなはれ、減筆、略筆による俳画の有り様、句意と視覺的イメージ協調による面白さを生ず。

一般に俳画は句に出る物象、意味内容に即せる「べたづけ」なる形象を画くこと多く、それが安易さ故に藝術性の一段と低くみらるる所以をなす。花鳥風月畫にては、主題との「べたづけ」を避けたりとみらるる蕪村なれど、俳画にては如何。蕪村に、「學問は尻からぬけるほたるかな」なる句あり。貧乏ゆるに燈油の買へぬ車胤の、螢の光にて本を讀みたる故事を踏へながらも、辛苦して學問に勵む姿を茶化すかのとき、あるいは韜晦せる自嘲の句として、繪そこに無くも滑稽さを有す。これに繪を付くるに、一般の者なれば螢を描かんか。蕪村はまづ、「書窗懶眠」と題字を書し、本一冊を脇に置きたる机に膝つきて眠れる男を描く。この男、「學問」なる抽象語のメタファーにして、こゝには螢も尻も登場せぬが、反語的なる「尻から抜けゆく螢の火」イメージされ、句との呼應、をかしみ限りなし。

蕪村に俳画の心得につきて書きたる書簡あり。蕪村の句

老なりし鵜飼おひことしは見えぬかな

に弟子月溪、魚籠ういに鮎あひ二尾の俳画を描き添へたり。そが上に蕪村書き付く。

すべて賛の繪(俳画)をかく事、画者のこころえ有べき事也。右の句に此画はとり合す

候。此画にて右の句のあはれを失ひ、むげのことにて候。か様かぎの句には只 篝かぎなどをたきすてたる光景しかるべく候

これは門人月溪に申たることを、直に其席にて書つけまいらせ候 かくる心得は萬事にわたることにて候。

蕪村

毎年のやうに見に行く鵜飼の折に必ず出會ひし鵜飼の老人ありたるに、今年は見當らぬ、さびしきことかなと思へるを、魚籠と鮎をえがきたるなればその氣持にそぐはぬ。俳画の畫材としては、鮎取りに燃えぬたりし篝火が消え行く様、わびしくて似つかはしからん、かかる俳句の内容と俳画の畫材のつけあひの工夫、つまりは文と繪との取合せが要諦なりとさすとす。まことに蕪村、海内一と自負せるだけの力量有せりと納得せらる。

因みに數ある蕪村が俳画の中に「辨慶圖」「踊圖」「門松圖」の重要文化財に指定せられをるは刮目に値するところなり。